干潟龍祥博士による 梵文「善勇猛般若經」の出版と般若經研究

安井廣濟

「勝天王般若經」と考えられていた Suvikrānta-vikrāmi-paripṛcchā（善勇猛般若經）が大般若の「第十六分」に相當することを、干潟博士が宗教研究（新第二卷第四號）に發表されてから、すでに三十五年を經過する。この間、むろん干潟博士は孜々として般若經研究を續行し、善勇猛般若經の梵文テキストの刊行も企圖されていたようである。しかし、第二次大戰など諸種の事情のために、刊行は中絶のかたちとなつていた。然るに、昨年、干潟博士の還暦記念に "Suvikrāntavikrāmi-Paripṛcchā-Prajñāpāramitā-Sūtra, edited with an introductory essay" が刊行せられ、遂に博士の年來の研究成果を見ることが出來た。博士は、この書において、善勇猛般若經の梵文テキストをおさめるのみならず、序論として般若經の成立にかんする種々の研究を發表しておられるので、これはまさに、般若經研究にたいする博士の今までの總決算ともいうべき意味をもつており、斯學專門の徒の必讀の書と思われる。淺學におじず、ごくあらましではあるが、紹介の一文を草する次第である。

一 「小品般若」より「大品般若」へ

一概に般若經といつても、大なるものは十萬頌般若から、小なるものは般若心經にいたるまで、般若經には種々の般若經があるが、これらの般若經の原型となる最も初期のものは、どのような形態のものであつたか。これは、般若經の思想の源流にさかのぼり、その發展のあとを尋ねる上に極めて重要な問題であり、この問題の解決は、大乘佛教の思想史を明らかにする一つの基礎的な方法である。ところで、周知のように、この問題にかんしては、大別すると、二種類の見方がある。一は、小なるものより大なるものへ擴大されたという見方、二は、大

なるものより小なるものへ縮少されたという見方である。この二つの見方には、むろんいずれも論據があつて、三十五年前の宗教研究誌上では干潟博士は、大なるものより小なるものへ縮少されたという見方を示されている。ところが、ここに紹介する博士の意見によると、この見方は完全に訂正せられ、綿密なる比較研究の方法によつて、小なるものより大なるものへ擴大されたという見方が示されている。多年の研究の結果のすえに訂正されただけに、今回の博士の主張は高く評價されるべきであり、おそらくは、決定的な主張になると思われる。博士の研究の方法は、小品般若の代表として最古の飜譯である「道行般若經」を取り上げ、大品般若經の代表として「放光般若經」を取り上げ、兩者の內容を比較し相異點を見いだすという方法であつて、博士はこの方法によつて、兩者の相異點九つを見いだし、それによつて小なるものより大なるものへ擴大したという小品原型說を主張されている。道行般若經と放光般若經との九つの相異點とは、次の如き九點である。

(1) 道行經では衆生救濟の方便善巧（upāyakauśalya）にかんする記述が簡單であるが、放光經は方便善巧にかんする詳細な念入りな具體的な記述を與える。(2)道行經は第十六章に願（praṇidhi）についての簡單な記述をもつにすぎないが、放光經は第五十九章に二十九願を述べ、詳細な說明をする。(3)全體にわたつて、道行經よりも放光經の方が、衆生救濟の利他の觀念をいちじるしく强調し展開する。(4)放光經は佛となる衆生の可能性にしたがつて、衆生を Samyaktva-niyatarāśi（正定聚）、Mithyātva-niyatarāśi（邪定聚）、Aniyatarāśi（不定聚）の三種類に區別するが（羅什譯、摩訶般若波羅蜜經三慧品第七十、參照）道行經にかかる區分は見られない。(5)道行經には mahābodhisattva, mahāsaṁnāhasaṁnadha についての記述が簡單であるが、放光經にはこれにたいする詳細な說明がある（第十五章――第二十一章）。(6)道行經は第二十三章である守行品において菩薩の四つの階位を語るにすぎないが、放光經は第二十一章の治地品に菩薩の十住を述べ、第三十九章の功德品に菩薩の十地を、また、治地品には共地を述べている。(7)放光經では第八章の終りまで舍利弗が指導的役割を演じているが、道行經では須菩提が指導的役割を演じている。道行經の第二章である難問品において、舍利弗が帝釋天から般若波羅蜜についてたずねられ〈須菩提にたずぬべし〉と云つているが、これは、道行經において須菩提が指

導的立場にあることを如實に物語つている。(8)放光經は Sarvajñatā（一切智）、Mārgajñatā（道種智）、Sarvākārajñatā（一切種智）の三智を語るが、道行經は Sarvajñatā のみしか語らない。(9)道行經には世俗諦（Loka-saṁvṛiti-satya）勝義諦（Paramārtha-satya）の二諦説がない。ところが、放光經には二諦説がしばしば述べられ、衆生救濟の世俗諦が强調される。

以上の九つの相異點を見るとき、小品が般若經の原始的な形態をあらわし、大品が小品を擴大し發展せしめたものであることは、明らかであろう。大品が小品に先立つて存在し、小品が大品の省略であるとは、とうてい考えられない。小品が大品にあつた願・方便善巧・二諦などの衆生救濟にかんする大乘佛教の重要教義を强調せず、或いは、省略し除去したと考えることは、全く不可能である。かくの如き省略は不合理であり無意味であつて、もしも、大品が小品に先立つて存在し小品が大品を省略したのなら、小品は大品に出ずる重要教義を含んでしかるべきである。だから、どうしても、大品が小品を敷衍し發展せしめたものであると、見なければならない。かくして、般若經の原本は小品に求めねばならぬというのが、干潟博士の結論である。

二　般若經の原本（原型）

然らば、小品の如何なる部分が般若經の初期の原始的形態であつたか。支婁迦讖（Lokakṣama）が178—189に譯した現存の道行般若經が小品の般若經のテキストとしてわれわれに知られる最古のテキストをあらわすと考えられるのであるが、これより古い小品の般若經は、どのような形態であつたか。これに就いて、まずわれわれは、竺朔佛（Kṣemabuddha）が道行經を飜譯したという「出三藏記集」の記事に注意すべきであろう。しかし、博士によると、竺朔佛の道行經と支婁迦讖の道行般若經との二つが存在したと考えるのは誤りであつて、竺朔佛がテキストを將來し、それを彼れ自身と支婁迦讖とが協同して飜譯したのであると、推定されている。かくして、博士は道行般若經のなかに般若經の原始的形態を探るべく、道行般若經の內容を詳細に研究し吟味して、次のような原型論を立てられている。大體のすじを紹介すると、次のようである。

道行般若經の第一章である道行品が般若經の原始的形態であるという見方がある。しかし、道行品には經典の終結を示す囑累（parīdanā）の文章はないし、ま

た、道行品は詳細な論議をせずにサンマリーの形態で述べられている。しかし、かかるサンマリーの形態が最初に存在したとは考えられない。初期の原始的形態は誤解を招きやすい不十分なサンマリーの形態でなく、むしろ、詳細であつたと考えるべきである。然らば、道行般若經の原始的形態はどのようなものであつたかというと、これに就いて、次の點が注意される。それは、道行般若經が第一章の道行品より第三十章の囑累品までの三十章で成り立ちながら、第二十五章に累教品という一章をもち、その累教品の半ば（大正、八、四六九、上、六―一八）に經典の終結を示すと見られる囑累にかんする實際上の言葉をもつことである。これは、明かに、道行般若經の古いテキストが第二十五章の累教品で終つていたことを示している。しかも、道行般若經では累教品の次が不可盡品であるが、相當經典である羅什譯の「小品般若經」と玄奘譯の「大般若第五分」を見ると、不可盡品のかわりに見阿閦佛品が開かれており――道行般若經の不可盡品の終りにも阿閦佛にかんする記述はある――その章の終りに〈時薄伽梵說是經已、無量菩薩摩訶薩……信受奉行〉という經典の結尾の言葉が出されている。この言葉は、經典の一般的形式からいえば、いま云つた直前の累教品の半ばに出ずる囑累にかんする言葉に直接つづくべき言葉である。だから、前後の事情を判斷すると、道行般若經の原始的形態は、第一章の道行品より第二十五章の累教品まで（阿閦佛を語る第十六章、第二十四章を除く）に〈時薄伽梵……信受奉行〉という結尾の言葉を附したものであつたのであり、不可盡品以下（羅什譯の小品般若經、及び、玄奘譯の大般若第五分では、見阿閦佛品以下）は後の附加であると考えられてくる。

以上が、道行般若經の原始的形態にたいする博士の論究の要旨であり、この道行般若經の原始的形態をもつて、博士は般若經の原本（原型）とされる。道行般若經に二つの囑累にかんする章の存在すること自體が、まことに奇怪であつて、この點、博士の論證はしごく當をえたものと思われる。

かくして、博士によると、道行般若經に出ずる阿閦佛の思想は、阿閦佛信仰の發生の影響の下に附加されたものと認められる。しかし、阿閦佛にかんする初期の經典である阿閦佛國經は、般若經に內容的に非常に近く、おそらく、般若經の古い原本を知つていたとも思われる經

典である。だから、阿閦佛の思想をもつている現在の道行般若經の累教品の次の不可盡品までに、〈時薄伽梵……信受奉行〉という結尾の言葉をつけた形態が、般若經の第二次的な古い原本であろうというのが、博士の推定である。累教品の次に見阿閦佛品という一章を開き、簡單ではあるが、經典の結尾の言葉をもつ羅什譯の小品般若經は、こういう第二次的な原本が存在していたことを示している。しかし、だからといつて、玄奘譯の大般若第五分が第二次的な原本を傳えるとは考えられない、というのが博士の意見である。玄奘譯の大般若第五分は、見不動佛品（見阿閦佛品）でおわつており、後續の章を有しない。だから、一見、いまいう如き第二次的な原本そのままの形態を思わしめる。しかし、博士によると、第五分に見阿閦佛品以下の後續の章がないのは、玄奘譯の大般若が第四分までに述べたものを冗長に繰り返さない整備された新しい形態のテキストの飜譯であり、古い形態のテキストを傳えないからであると考えられている。しかし、いちおう、形式的には玄奘譯の第五分が、般若經の第二次的な原本をあらわすものと認められている。

三　般若經の發達

干潟博士は、以上のように、小品の中に般若經の最古の原本（原型）と第二次的な原本（原型）とを求められたのであるが、博士によると、般若經のその後の發展の實際上の基礎は、第二次的原本、すなわち、〈道行般若經の不可盡品までを含むテキスト〉にあると考えられており、次のような二種類のテキストが、この第二次的な原本から發展したとされる。

(1)　第二次的原本に續く「隨品」以下の各章を有するもの。(2)第二次的原本の各章を擴大し、新しい章を附加して、方便善巧・十地・佛國土清淨・三智・二諦などの大乘の重要教義を强調するもの。

右の中、(1)は小品般若の原本といつてよく、次のような二つのタイプに發達する。

㋑　羅什譯の小品般若經のタイプ。これは大般若の第五分によつても示される。㋺　道行般若經のタイプ。これは、大明度經、摩訶般若鈔經、大般若の第四分（但し、第一章に二諦說、第五章に十地說があり、發達がみられる）、施護譯の佛母般若、梵文の八千頌、及びそのチベット譯によつて示される。

(2)は大品般若の原本といつてよく、次のような三つのタイプに發達する。

㋑ 大般若第三分のタイプ。これは、形態の上では初期のタイプをもつが、その教義や思想の內容は、第一分、第二分より以上に發展を示している。チベットに傳わる一萬八千頌(Aṣṭadaśa-sāhasrikā)は、このタイプに屬する。なお、チベットに傳わる一萬頌(Daśa-sāhasrikā)は一萬八千頌ときわめて似た一致點をもつている。これは、一萬八千頌の種々の部分を取り來つた混合のようである。㋺放光經のタイプ。これは光讚經によつても示される。㋩羅什譯の摩訶般若波羅蜜經のタイプ。大般若の第二分は㋺と㋩との混合したタイプである。梵文の二萬五千頌般若は㋑と㋩との混合したタイプであるが、だいたい、この㋩のタイプに近い。なお、梵文の二萬五千頌は彌勒(Maitreya)に歸せられる Abhisamayālaṁkāra にしたがつて作られた部分的區分をもつた Abhisamayālaṁkārānusāreṇa-saṁśodhitā であつて、オリジナルな二萬五千頌と異つた改訂本である。博士によると、この改訂の時期は、五世紀、或いは、八世紀とも考えられる、といわれている。

十萬頌般若(Śatasāhasrikā)は、大品般若の原本が最大のスケールに擴大したものであり、大品般若の傳播の或る時期——おそらく羅什がシナへ來る頃——に發生したものと考えられるが、現存のテキストは、大般若の第一分と梵文の十萬頌との二つのタイプに分れる。

小品と大品という二種類の般若經の源流と發達は、干潟博士によつて、だいたい以上の如く說明されている。竺朔佛と支婁迦讖とが道行般若經を飜譯したのが178—189とすれば、道行般若經のテキストは、少くとも二世紀の前半にはインドに存在したであらう。だから、最古の般若經の原本、第二次的原本の如きは、さらに時代をさかのぼると見なければならない。般若經の源流は古く、その發達はまことに多岐である。

以上によつて、大般若でいえば、第一分より第五分に到るまでは明らかとなつたのであるが、然らば、第六分以下はどのような事情にあるのであるか。博士は、第一分より第五分に到る、すなわち、小品と大品とを一括して Mahā-PPSs.(大般若經)となずけ、第六分以下を Miscellaneous-PPSs.(雜般若經)となずけられている。すなわち、第六分以下はそれぞれ獨立した別個のテキス

トであり、かつ、それらは般若思想の概説書や綱要書の如き性格のものとして現われたと考えられる。これらの雑般若經について、博士の説にしたがつて一言しておくと、まず、第六分(Devārāja-Pravara-PPS. 勝天王般若)は、六世紀の初頭にシナに知られたようであるから、これの原本は五世紀にはインドにあつたと推定される。第七分（Saptaśatikā-PPS. 文殊般若）は、六世紀の始めに漢譯されているからこれの原本はおそくとも五世紀にはインドに現われたと考えられる。第八分（Nāgaśrī-PPS. 濡首般若）の原本は、金剛般若と同代か、それより少し後であると考えられる。第九分（Vajracchedikā-PPS. 金剛般若）は、多くの註釋書が作られているところからみて、三世紀の中葉にはこれの原本があつたと推定される。第十分（Adhyardhaśatikā-PPS. or Naya-PPS. 理趣般若）は、金剛乘の學派の若干の特徴を示しているから、これはかなり後期であり、六世紀の初頭から七世紀の中ばにかけて現われたものであろう。第十一分――第十五分（Pañcapāramitā-nirdeśa）は、第十分より時代が古いとみられるが、この經典は布施――禪定を説き般若波羅蜜を説かないので、チベット大藏經では諸經部に入つている。しかし、この經典は六波羅蜜を語る第十六分(Suvikānta-vikrāmi-paripṛcchā-PPS. 善勇猛般若)を引き出すためのものとも見られるのであつて、玄奘がこれを大般若の第十一分――第十五分に含めるのは正しい。

四　大般若第十六分「善勇猛般若經」に就いて

「善勇猛般若經」についての解説を干潟博士の研究にしたがつて、少しく述べておこう。ケンブリッジ大學圖書館にあるマヌスクリプトのコロホンによると、この經典の名稱は、Ārya-suvikrāntavikrāmi-paripṛcchā-prajñāpāramitā-nirdeśa-Sārdhadvisāhasrika-Bhagavaty-Ārya-Prajñāpāramitā となつている。Suvikrāntavikrāmi(善勇猛）とは菩薩の名であつて、この經典は善勇猛菩薩がたずね、世尊が答えるから、このような名稱をもつている。この經典は清辨（Bhāvaviveka or Bhavya）の般若燈論にしばしば引用されるから、玄奘よりも百年ほど前に、すでにインドで重要な般若經典として知られていたらしい。この經典の現在のサンスクリット本とチベット譯と漢譯（大般若第十六分）との三つのテキストを比較すると、サンスクリット本とチベット譯とは、特殊な文句や語句にいたるまでよく一致するが、漢譯は全々ちがつている。またサンスクリット本とチベット譯とは全體を Nidāna,

Ānanda, Tathatā, Aupama, Subhūti,Caryā, Anuśaṁsā の七章に區分するが、漢譯には全く章の區分がない。しかし、內容を比較すると、サンスクリット本やチベット譯よりも漢譯の方に原本（原型）に忠實であると見られる箇所があるから、初期の原本には漢譯のように章の區分がなかつたと推測される。しかし、漢譯は初期の形態を傳えると見られるにもかかわらず、一面、サンスクリット本やチベット譯よりも、教義や思想內容に發達した後期の要素を含む場合もある。七章の區分にしたがつて、全體の內容をうかがうと、この經典は般若經の重要教義の廣汎な說明を與えている。だから、この經典は般若經文學における後期の生成であり、新しい大乘の思想や教義がすでに定まつた時代の產物であると考えられる。かくして、干潟博士によると、この經典は金剛般若經や心經よりもおそく現われ、小品や大品のように尨大でなく、金剛般若經や心經のように短くもなく、大乘經典として適當な形態に縮められた、般若經の綱要書であろうと考えられている。しかし、この經典は經典としてかなり後期の經典であるが、如來藏思想や阿賴耶識思想を含まない。parikalpita（遍計）、pariniṣpanna（圓成）、ālaya（阿賴耶）というような言葉は出るが、これらの言葉は瑜伽行派において使用されるような意味でなく、一般的な意味で使用されているにすぎない。

以上は、干潟博士の還曆記念に出版された“Suvikrāntavikrāmi-paripṛcchā-prajñāpāramitā-sūtra”の第一部である An Introductory Essay on Prajñāpāramitā Literature のなか、主として般若經の成立にかんする問題が論ぜられている第三章、第四章、第六章における博士の研究のあらすじを紹介したにすぎない。博士は、第一章において般若波羅蜜の概念を示し、第二章において諸般若經のリストを掲げ、さらに、羅什時代を經て玄奘に到るまでに知られる各種般若經の考照に詳細をつくし、第五章においては大智度論の著者に就いて綿密な研究をすすめられている（印度學佛教學研究、第七卷、第一號）。般若經の成立にかんする博士の研究の方法は、諸本の比較、ことに漢譯諸本の比較によつて、それらの諸本が基いた種々の原典を想定し、そこに原典の原始的形態（原本、原型）を究明せんとする方法であるが、これは佛教の長い歷史的變遷を考えるとき、たしかに妥當性をもつた方法である。原典は佛教の思想史的な發展とともに變遷をうけたのであり、漢譯諸本の各々は、この原典の變化の種々の段階を

あらわすと考えるべきである。般若經の研究は、このような歴史的な方法によつて客觀的に明らかにされていくであろう。第二部の Suvikrāntavikrāmi-paripṛcchā-prajñāpāramitā-sūtra（善勇猛般若經）の原典出版は、これを勝天王般若經にあらずして大般若の第十六分と證定された博士にとつて、まことに記念すべき出版であり、われわれのひとしく喜こびとするところであるが、また、このような歴史的視點からも大きく意義ずけられるであろう。般若經の源流にさかのぼり、その發達のあとをたずねるとき、實際われわれは、善勇猛般若を般若經成立史の一環として、意義ぶかくながめることが出來る。博士の研究の關心も、またここにあるようである。なお、第二部の梵文テキストは、漢譯のみならずチベット譯とも對校されており、ながく研究の基礎として高く評價されるであろう。卷末に第一部の索引のみならず、第二部の梵文テキストの索引がつけられていることは、斯學の研究者にとつての非常な喜こびである。また、卷末の般若經諸譯對照表はまことに嚴密であり稱讃に値する。